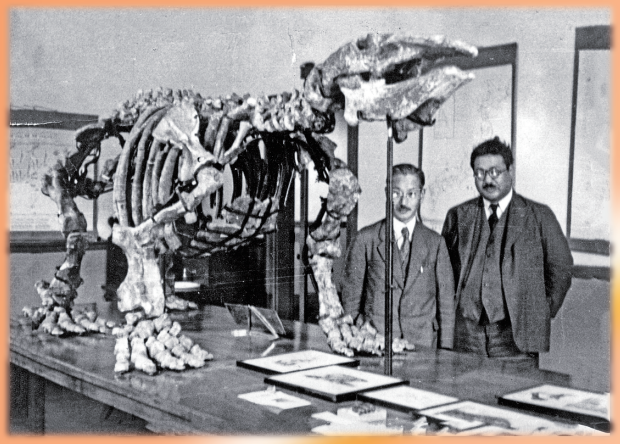
ISSN 2434-3072



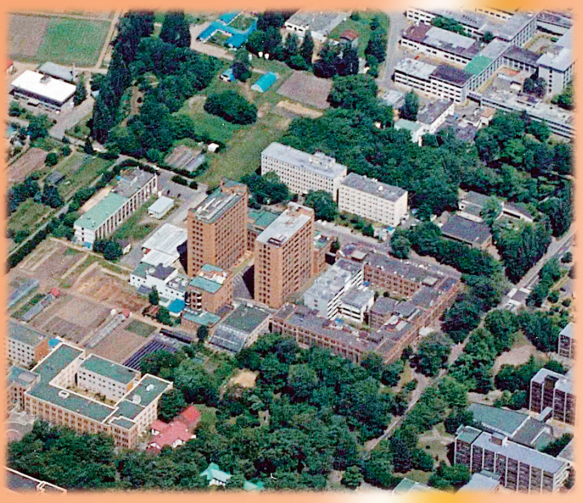
1930s



1950s

北海道大学150年史 編集ニュース

第 6 号　2021年2月26日



2000s

目　次

巻頭言　山本文彦 …… 2
〔北大歴史ノート　第６話〕
原田三夫の予科入学 …… 4
〔北大風景グラフVI〕
農学部 …… 5
〔資料紹介〕収蔵庫さんぽ …… 6
〔活動紹介〕日誌 pick up …… 7
〔編集後記等〕 …… 8

巻頭言

山本 文彦
（北海道大学150年史編集準備室室長）

2020年10月1日に大学文書館長に着任しました。どうぞよろしくお願いいたします。

私は文学研究院の教員で、専門は西洋史学、ドイツ中世・近世史を研究対象にしています。北海道大学に赴任して28年目になりますが、これまで文書館を訪れたことがなく、着任後初めて10月15日に文書館を訪れました。文書館の活動状況や現況について説明を受けた後、収蔵庫を一つ一つ丁寧に案内して頂きました。各収蔵庫には、歴史的に重要な公文書を始め、大学刊行物、委員会等の資料、学科・講座等の資料、サークルや学生寮関係の資料、さらには卒業生や教員の日記やノート、手帳などが整然と保管されていました。実にさまざまな資料があることに驚くとともに、文書館が大学内で果たしている重要な役割の一端を知ることができました。これらの資料を整理・保管するとともに、展示等によってさまざまな資料を広く紹介する必要を改めて感じました。展示の仕方については、現今のコロナウィルスの状況を考慮し、新たな方法を模索しなければなりませんが、同窓生の皆さんをはじめ、多くの皆さんに見て頂けるように工夫をする必要があると思います。この展示の問題とともに、資料を保管するスペースの問題も考えますと、デジタル化を進めることは不可避であるように思います。予算の問題もありますが、大学文書館の今後のあり方として、デジタル化を計画的に進めていく必要があると考えています。



大学文書館収蔵庫に収められた資料

自分自身の研究においても、デジタル化は確かに進んできており、自分の研究室にいながら、論文は言うまでもなく、ヨーロッパの図書館などに所蔵されている多くの重要な史料も見ることができるようになり、大変に便利になりました。実際に史料に書かれていることを読み取るだけであれば、デジタル化した史料は確かにとても便利です。しかしその一方で、史料あるいは書籍の持つ独特の存在感あるいはその独特な匂いを感じることができないように思います。

匂い。どうも私は匂いが気になるようで、ヨーロッパの空港や駅、ヨーロッパの街を歩いている時、匂いが気になります。図書館も同様で、ドイツとオーストリアなどの図書館や文書館あるいは郷土資料館・博物館などをこれまで数多く訪ねてきましたが、それぞれに独特の匂いを感じました。ウィーンの図書館を数年ぶりに訪れ、その閲覧室に入って匂いを嗅いだ時、懐かしいと感じました。こうした経験はこれまでも数多くあったのですが、これを「プルースト現象」と呼ぶことを先日の新聞で知りました。臭覚と記憶の間に特別な関係があり、匂いが引き金になって、意図せず何かの記憶が呼び起こされる現象を「プルースト現象」と呼び、心理学や脳神経科学の実験でも確認されているようです。マルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』の冒頭で、主人公が紅茶に浸したプチットマドレーヌの香りから幼少期を思い出す場面が、その由来のようです。

『失われた時を求めて』ではプチットマドレーヌでしたが、私の場合は古い本の匂いかもしれません。大学院生として、研究室に初めて与

えられた机のすぐ後ろには、製本された19世紀に刊行された雑誌が並んでいました。自分の研究とはあまり関係がない雑誌でしたが、時々その本を開くと、黄ばんだ紙から独特の匂いがしました。かび臭い古本の匂いは、大学院時代を過ごした研究室の記憶と結びついています。古い本の匂いは、もう一つ別の記憶と結びつきます。北大に赴任して数年後、文部省の若手在外研究で10ヶ月間ドイツのゲッティンゲン大学に行ったことがありました。ゲッティンゲン大学では、歴史学の図書室の中に専用の机を与えられました。この歴史学の図書室は、ゲッティンゲン大学の巨大な研究教育棟（通称「青い塔」）の中にあり、私の机の近くには、ドイツ各地の地方史の雑誌がありました。日本から一つ一つ郵便で取り寄せていた雑誌論文が、すぐ目の前にあり自由に見ることができる幸福を感じたひとときでした。さらにその近くにはローマ教皇庁関係の刊行史料が収められている本棚があり、その膨大な量に圧倒されたことを思い出します。机は窓に面しており、冬から春そして夏に向かう季節の変化を見ながら、ゆっくりといろいろな論文等を読んだ幸福な時間の記憶が、古い本の匂いと結びついています。

ゲッティンゲン大学には、この当時ドイツの最先端の設備を備えたガラス張りが印象的な綺麗な図書館もありました。この図書館にも頻繁に出かけたのですが、書庫には入ることはできず、PCで借り出し予約をすると翌日カウンターで受け取るシステムでした。自由配架の書籍もありましたが、古い本の匂いとこの場所は結びつきません。明るい図書館の中にはカフェスペースがあり、当時ゲッティンゲン大学に留学していた日本人大学院生（現在W大学教授）とコーヒーを飲みながらいろいろな話をしました。専門が同じドイツ史でもあり、歴史学の図書室で論文を読んでいると、コーヒーを飲みましょうと誘ってくれました。ゲッティンゲン大学の図書館は、コーヒーの香りと結びつく空間です。

デジタル化の話から匂いの話に脱線してしまいましたが、文書館にある資料は、多くの人のさまざまな記憶と結びついています。デジタル化を進める一方で、多くの方の記憶と結びつく資料も大切にしなければならないと考えています。今後の大学文書館の活動にご協力をよろしくお願いいたします。



大学文書館所蔵資料に見るゲッティンゲンの街並み

1932～1934年欧州に留学、ドイツのゲッティンゲン大学、カイゼル・ウィルヘルム研究所などで化学研究をした堀内寿郎（後に理学部教授、第9代学長）の旧蔵絵葉書から。

北大歴史ノート　第６話
原田三夫の予科入学

札幌農学校に憧れて

原田三夫（1890－1977、科学評論家）は、愛知県名古屋市に三人兄弟の末子として生まれた。

愛知県立第一中学校に入学し、植物、地学、文学、絵画を好んだ原田は、理科教師の松原愛治郎からしばしば札幌農学校の紹介を聞いた。美しい環境、師弟のこまやかな情愛、輩出した人格者などの話は、大変魅力的であった。「松原先生は、同校は農学校といっても、何でも好きな研究ができるといったが、それならば私の好む植物の研究もできると思った」という。志賀重昂（札幌農学校第4期生、思想家）の論説にも影響をうけ、札幌農学校への入学を決意した。

東京会場での受験

中学校を1907年3月に卒業した原田は、7月15日朝、東京市浅草区にあった東京高等工業学校の大講堂前にいた。入口には「札幌農学校入学試験場」と大きく書いた紙が貼られていた。1907年の入学試験は7月15日から4日間、札幌と東京の2ヵ所で実施された。

札幌農学校は同年9月1日付で東北帝国大学農科大学に昇格することが決まっており、この試験は、高等学校相当の「大学予科」への入学者を選抜するものであった。「だから、志願者は例年のように少なくはなかった。募集人員百人に対し、志願者が五百人ぐらいあったことを、のちに知った」と、原田は記す。

試験監督は“親玉の紳士”

試験開始の時刻が近づくと、一挺の人力車がやってきた。「乗っていたのは白い麻の服を着た、金縁眼鏡の立派な紳士で、扇子を使っていた。試験官の親玉だなと思った」。

試験が始まると、「親玉の紳士」は、願書に添えて提出した写真を受験者の顔と見比べてまわった。原田は特に写真を示されて「これですか」と質問され、特別待遇を受けたようで嬉しく思った。その紳士の容貌・風采・態度は、「何となく敬愛の念を私の胸に湧かせた」という。この「紳士」こそ、当時教務部長を務めていた植物学者の宮部金吾教授であった。

一方で、「答案のできばえは、いいとは思われなかった」。特に2日目の英語の「彼は言はばまあ書蠹（シミムシ）です」という一文の英訳では、「シミが書物を食う昆虫であることは知っていたが、シミの英語は知らなかった。しかたがないから、an insect which eats book とやったように記憶する」。当時の問題集の解答例は、「He is, so to speak, a book-worm.」であった（『諸官立学校入学試験問題答案詳解』金刺芳流堂・武田芳進堂、1907年）。他の問題はなんとか解けた感触があったものの、英訳の一件で落第だと悲観したという。

エルムの森を逍遥

合格者は、7月31日付『官報』に掲載された。半ばあきらめながらも母校の名古屋市立第四高等小学校まで行って閲覧すると、筆頭に原田の名があった。首席での合格であった。

9月の入学を前に、原田は札幌農学校を訪れた。正門を入り少し進んで右手にあった「村役場のような二階建ての事務所」で入学手続きをおこなうと、校舎の見物へ向かった。その際に目にした構内風景を、次のように描写している。

> 道が少し下りになり、小川に架けた木橋を渡ると、また上りになり、左に沿った小川が、じきに道から離れ、野地を蛇行して林の中に消えた。その野地にスケーチングポンドがあった。道の右側も低い湿地で、春には一面にミズバショウの白い花が咲くと聞いた。
>
> 道が直線になって鮮緑の草原に通じ、その左右に立ち列ぶエルムの大木に隠見して、白壁の土蔵のようないくつかの校舎があった。……校舎のあるところの手前で、右に直角に分れた直線の道が、鬱蒼たるエルムの森のなかに遠く通じ、その左に運動場、道の終ったところの右側に寄宿舎の恵迪寮があった。

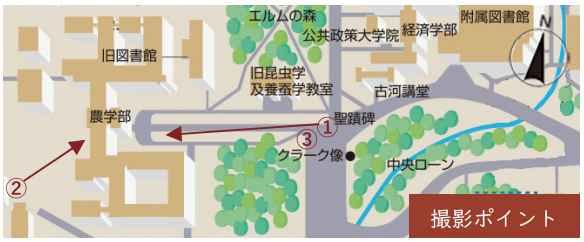
原田はそのまま恵迪寮への入寮を申し込み、南寮の4人部屋で札幌での生活が始まった。

（出典）原田三夫『思い出の七十年』誠文堂新光社、1966年

（廣瀬）

北大風景グラフVI

農学部



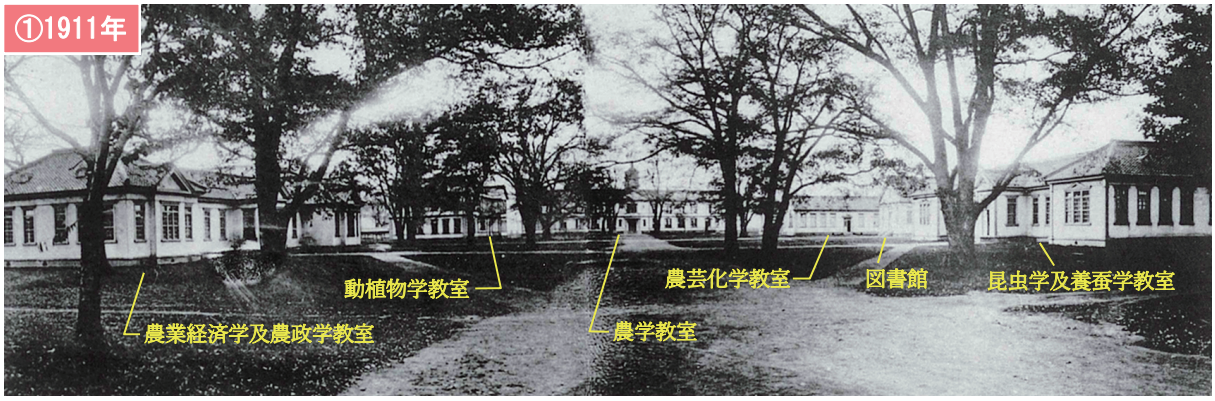
札幌農学校は、1876年開校時の北1条キャンパスから、1903年に北8条以北に広がる附属農場の敷地内に移転した。校舎は教室ごとに複数の建物に分かれ、北8～北9条西6～西9丁目（現在の農学部周辺）に建てられた。写真①は、大学昇格後の東北帝国大学農科大学の時期に撮影されたものである。正門から道沿いに進み、畜産学教室（1909年新築）や林学教室（古河講堂、1909年新築）の建物を順に通り過ぎると目前に広がっていた光景で、正面突き当たりには農学教室（1901年新築）があり、北側には手前から昆虫学及養蚕学教室（1901年新築）、図書館（1902年新築）、農芸化学教室（1902年新築）が、南側には手前から農業経済学及農政学教室（1901年新築）、水産学教室（1906年新築）、動植物学教室（1901年新築）が、それぞれ向かい合うように建っていた。

1935年には、農学教室の正面に、新しい農学部本館が建設された。写真②は、1935～1936年頃に撮影された新旧両棟である。農学教室は1936年9月に取り壊され、同年10月の陸軍特別大演習に際しては新築まもない農学部本館に「大本営」・「行在所」が置かれた。農学部本館の建設は1936年の増築以降、計画の途中で中止していたが、1951年に再開し、1960年までに南翼・北翼が増築された。写真③では、現在とほぼ同じ姿がうかがわれる。

一方、周囲の各教室の多くは取り壊された。現在も残る建物は、赤い屋根の旧図書館、青緑色の屋根の旧昆虫学及養蚕学教室、古河講堂である。旧図書館は北海道大学出版会が使用している。他の二つの建物も、前者は北方文化研究室やスラブ研究施設など、後者は教養部や文学部が使用するなど、様々に用途を変えてきた。これらの建物は、増改築を経つつも、周囲の緑地とともに往時の景観を伝えている。

（佐々木）

①1911年



（「東北帝国大学農科大学写真帖　行啓記念」より）

②1935～1936年



（土佐林義雄撮影）

③1970年代



（施設部旧蔵写真）

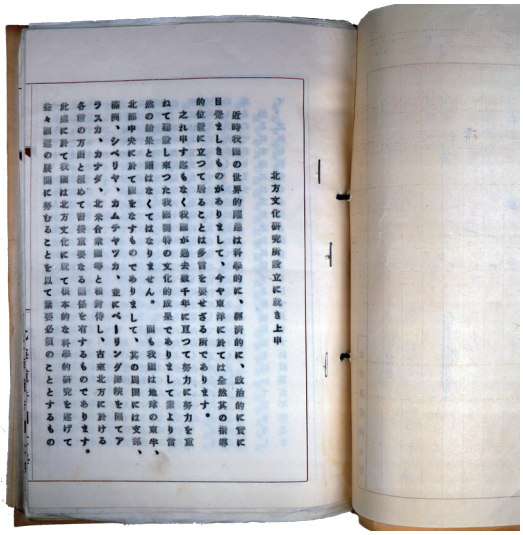
〔資料紹介〕 収蔵庫さんぽ

北方文化研究室に関する文書綴 ～上原轍三郎旧蔵資料より～

上原轍三郎博士（1883－1972）の旧蔵資料を、2020年9月18日に坂下明彦名誉教授より受贈しました。上原は、東北帝国大学農科大学の卒業生で、1931～1946年に農学部教授を務めた農業経済学者です。1934年には第3代総長に就任した高岡熊雄の後任として図書館長に就任し、1946年まで務めました。

受贈資料には、帝国大学附属図書館協議会の会議資料、北海道の農業に関する収集資料のほか、北方文化研究室（1937年設立）に関する草案・手控えを綴った文書綴や辞令類が含まれています。文書綴には、設立上申書の草稿、「北方文化研究室規程案」、研究方針の備忘録、北海道に関する文献等の筆写資料目録などがあり、具体的な設立の経緯がうかがえます。

上原は、1937年10月研究室の設立後、「主任」として研究室の運営に携わり、1942年以降は研究事項を分担する「委員」として研究室を支え続けました。（佐々木）



「北方文化研究所」設立上申書の草稿

低温科学研究所創立25周年記念品

2020年9月25日に、低温科学研究所が1966年11月25日に創立25周年を記念して作成したセンタークロスを出村文理氏（元工学研究科・工学部事務部長）より受贈しました。

クロスの絵柄は、古河藩主土井利位（としつら）による雪の研究書『雪華図説』（天保3年刊行）に掲載された雪の結晶図で、江戸時代には「雪華文様」として流行したものです。

低温科学研究所では『雪華図説』を「加納文庫」（極地研究家加納一郎の旧蔵書）として所蔵しています。

『雪華図説』は、低温科学研究所が1966年8月に開催した「低温科学国際会議」の際にも、雪の研究に関する記念展示として陳列されました。（佐々木）



〔活動紹介〕 日誌 pick up

写真資料の目録作成とデジタル化

150年史編集準備室では、写真資料の目録作成、写真のデジタル化、「大学文書館所蔵資料検索システム」への登載など、写真の整理に注力しています。現在は、『写真集北大125年』編集の際に事務局総務課広報掛より提供を受けた写真アルバムを対象に整理作業をすすめています。アルバムには、1960～1990年代に広報材料として撮影した構内の施設、風景、行事の写真が貼付されています。現存しない建物も多くみられ、キャンパスの遷り変わりがうかがえます。



事務局（本部） **（1965年撮影）**

中央ローンに架かる橋の北東側にあった旧札幌育種場事務所（1884年新築）の建物は、1966年まで事務局として使用された。



第一サークル会館 **（1979年撮影）**

旧農業経済学及農政学教室（1901年新築）の建物は1965年からサークル会館として使用されたが、1979年に焼失した。



山下生化学研究室 **（1979年撮影）**

山下太郎氏（農芸科1909年卒業）の寄附により、1939年に建てられ、1975年まで理学部化学科が使用した。



工学部本館 **（1960年代撮影）**

工学部本館（1923年新築）は、白色を基調として尖塔を備えた佇まいから「白亜館」と呼ばれた。新校舎への建て替え（1966～1967年）に伴い解体された。

（廣瀬）

編集準備室日誌

大学文書館は、9月以降も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、「北海道大学の行動指針（BCP）」のもとで業務をおこなっています。室員は、在宅勤務を織り交ぜたシフト制をとりつつ、ご寄贈いただいた資料の整理、写真資料のデジタル化、目録の検索システムへの登載をすすめています。

開館・開室状況は、今後もBCPの制限レベルに応じた変更が見込まれるため、随時ホームページにてお知らせいたします。お問い合わせは、電話、メール、郵便にて承ります。

資料の収集・保存にご協力を

探しています　新入生歓迎冊子

『新入生歓迎パンフレット　楡』（1992年4月7日発行）

新入生が最初に手にする「新歓パンフ」。『楡』は、学生団体である全学新入生歓迎実行委員会が編集し、配布した。
1992年版では、キャンパスのイラストマップ、クラス活動や教養祭への勧誘、各学部の紹介、北大用語辞典など、学生目線の多様な記事を盛り込んでいる。



南部舜氏寄贈資料より

上記のほか、大学文書館では
・『楡』（1984～1988年、沖高行氏寄贈）
・教育学部学生自治会『新入生歓迎パンフレット』（1978年、田中稔久氏寄贈）
・『文学部新入生歓迎パンフレット　道しるべ』（1986年、大黒真苗氏寄贈）
などを所蔵しています。

編集後記

◇新室長の山本文彦理事・副学長（大学文書館館長）に、巻頭コラムをご執筆いただきました。
◇表紙は2020年に創立90周年を迎えた理学部をとりあげました。

表紙図版——理学部の90年
・デスモスチルスの骨格を発掘・復元した長尾巧教授（左）と、岩石学専門の鈴木醇教授（右）　1936年（No.100-504）
・創立25周年記念公開でにぎわう理学部本館前　1955年（理学部創立二十五周年記念写真帖より）
・高層棟の五号館までが建ち並んだ理学部　2000年頃（施設部旧蔵写真）

北海道大学150年史編集ニュース　第6号
発行日　：2021年2月26日
編集・発行：北海道大学150年史編集準備室
〒060-0808
札幌市北区北8条西8丁目
北海道大学大学文書館内
開室日　：平日（月～金）9:30～16:30
（祝日、年末年始12/29～1/3を除く）
TEL/FAX　：011－706－2395
E-mail　：hu150@archives.hokudai.ac.jp
URL　：https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/hu150.html

